



三國一夜物語

二

13
3021
2



門へ 13
3021
2

富士三國一夜物語卷之二

東都 曲亭馬琴著編

昭和九年七月一日 購末

第二編

富士右門龜と放つ及商人五四郎が夏

柳との富士右門知之へ三世薄命あして邊鄙に落魄うつける。

今不意幸福をゆて父祖の耻を雪り絶する家を興さるる豫て

その吉兆のりり。ゆるる六月のたづり一日假寝の夢に黒皮威の

鎧の龜甲形の古金襴の直垂と被て玳瑁の表装しつる太刀を

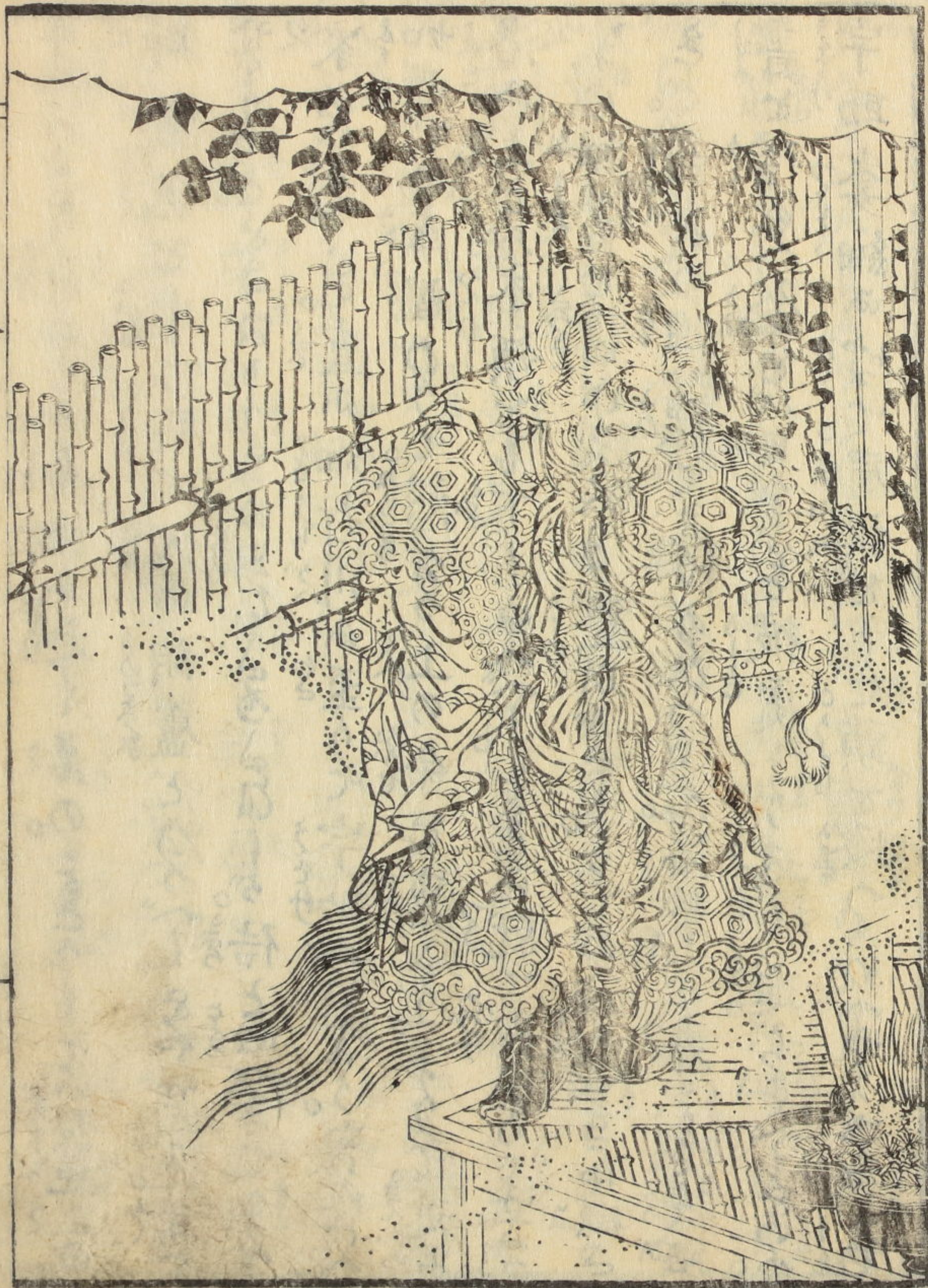
俣面色うも墨の如くみして相貌頗兇悪なる武士北の方より

来つ右門が枕方み停立てりき。こゝろ數百年三總の浦曲の

挿のり。あつるみけの過て敵み捕つ。既み命危し。此身あつ

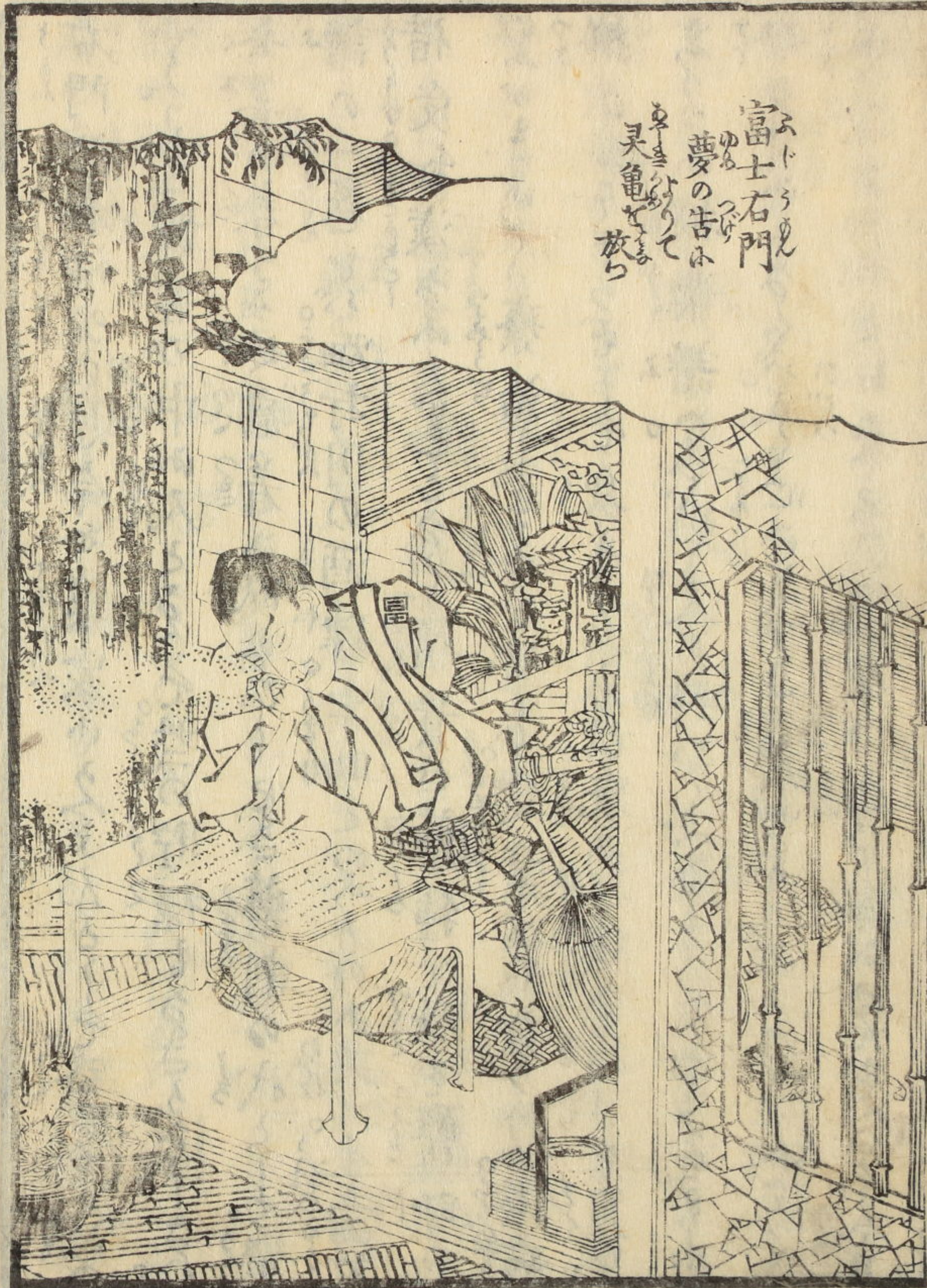
三國卷之二

登中



三日月夜

四



富士石門
夢の吉小
早きつりて
天亀せよ
放ら

三日月夜

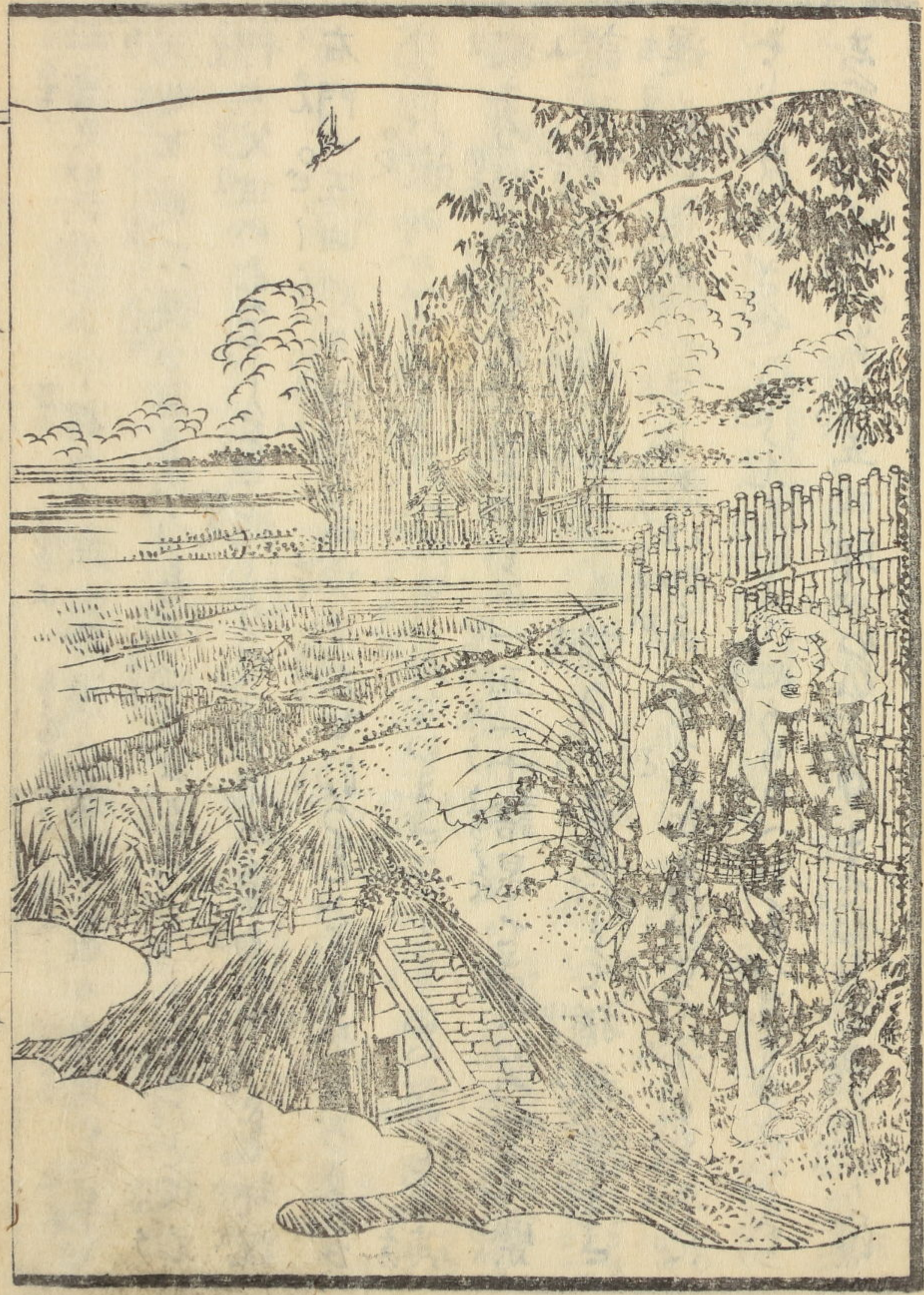
三

中も。ひとり茨村のうへへ帰りおけ。忽ち後方より来る人
 のりて。右門が袖を引いていひやう。吾身の今彼處の酒肆の
 めりて。此身が主人と物うらうし。いふをよく。變ちてさへ来
 つるまう。うらう。首もなく尾もなく物いひうけ。あせせ。奇
 りもあらん。吾身の元と駿河のけし。いふ。おのれ。
 いふ。さな。此身が。いふ。うらう。まう。て。ける。五四郎といふ。いふ。
 今。洛の五條。うらう。いふ。些の店を。開き。いふ。うらう。の古き物を
 買ひ。賣もして。活業と。いふ。うらう。も。洛へ。上ると。いふ。うらう。旅の
 ともめて。ひとり。の母と。いふ。うらう。の國の。残。いふ。うらう。て。出。うらう。いふ。うらう。得。洛
 世。うらう。の便宜の地。いふ。うらう。終。いふ。住。果。いふ。うらう。定。も。此。度。母。と

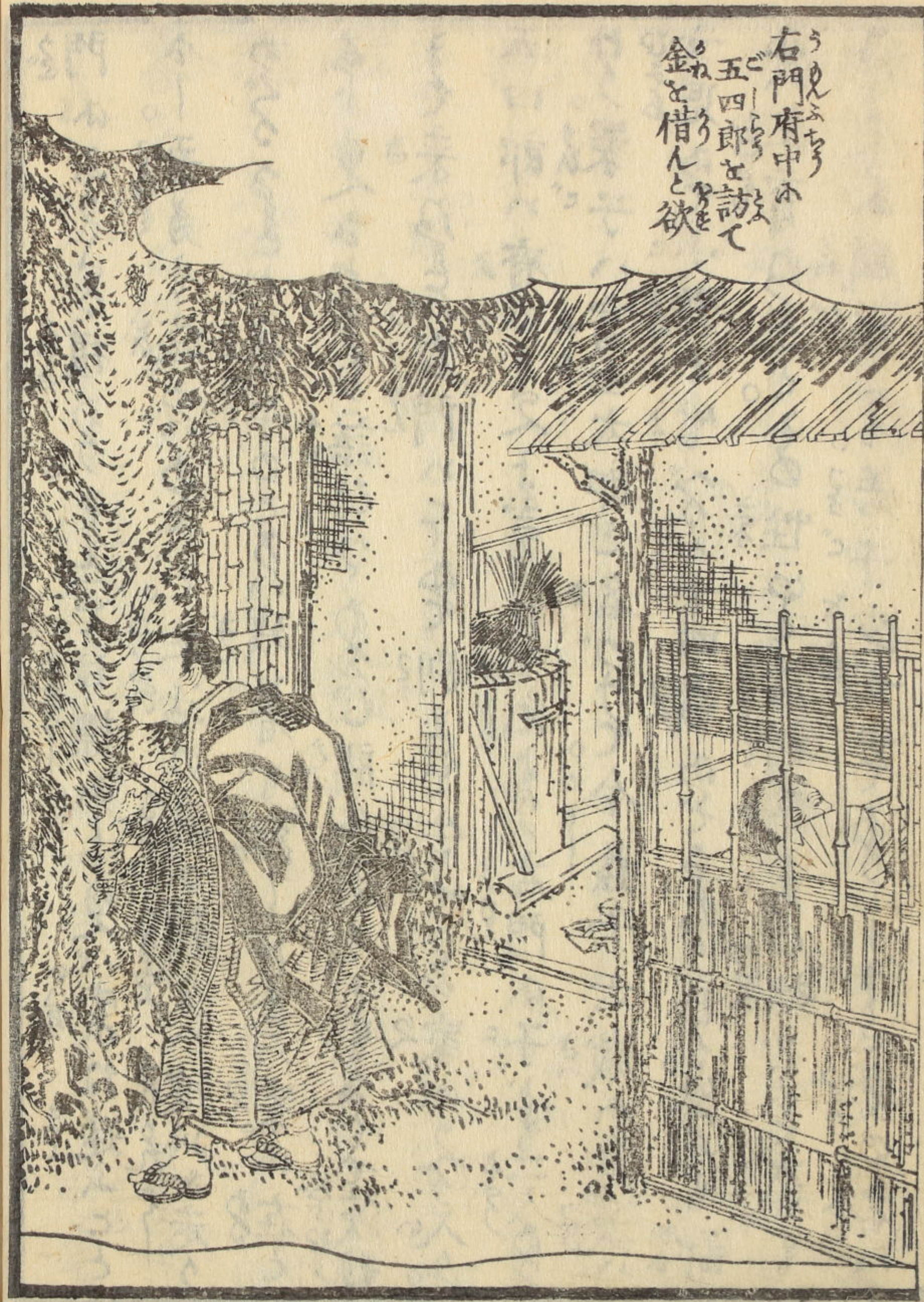
迎へ。いふ。うらう。ん。爲。いふ。下。り。いふ。うらう。ま。うらう。今。彼。酒。肆。の。いふ。うらう。を
 聞。いふ。稀。いふ。うらう。る。幸。福。いふ。うらう。て。洛。へ。上。り。いふ。うらう。ま。うらう。て。稱。いふ。うらう。る。秘。書。を
 中。いふ。ん。彼。主。人。が。いふ。うらう。ま。うらう。の。質。と。いふ。うらう。つ。うらう。久。ま。うらう。ね。も。田。舎。人。の
 頑。いふ。いふ。うらう。ま。うらう。え。て。うらう。いふ。うらう。ど。寶。の。山。へ。入。り。いふ。うらう。ま。うらう。手。を。空。ま。うらう。し
 め。いふ。うらう。ま。うらう。の。い。と。あ。いふ。うらう。ま。うらう。身。の。應。いふ。うらう。じ。うらう。程。いふ。うらう。る。いふ。うらう。金。を。貸。進。し。ま
 べ。いふ。うらう。ま。うらう。是。一。つ。いふ。うらう。の。身。が。洛。の。て。發。跡。いふ。うらう。つ。いふ。うらう。れ。と。縁。いふ
 ま。いふ。うらう。て。ま。いふ。うらう。て。の。物。を。賣。いふ。うらう。べ。く。又。一。つ。いふ。うらう。の。單。身。の。て。母。と。いふ。うらう。ま。うらう。入
 たる。いふ。うらう。の。旅。を。せん。いふ。うらう。の。路。次。の。程。も。心。の。ま。いふ。うらう。ま。うらう。と。いふ。うらう。の。い。し。身
 道。連。と。いふ。うらう。て。いふ。うらう。の。便。よ。うらう。ら。いふ。うらう。ん。の。故。いふ。うらう。の。ま。いふ。うらう。が
 ぬ。いふ。うらう。の。思。い。うらう。ら。いふ。うらう。の。ハ。中。つ。れ。常。言。いふ。うらう。の。い。君。と。思。い。うらう。の。ま。いふ。うらう。の。ハ

是るべしといと信ぶるその右門ハ熟るの男と知る人
 証るべき癖者ともおぼへて東言の中のみと都の手づらうち
 まらへて物のいびるも商人めきたればまら心ちかて則答へ
 けるやう。つぎ人せよくきりぬるに隠ひふす。日来ハ
 親く交交する人づれも。金銀のりあつきて相語ぐきき
 ひらふ。斯懇の交えぬるをきりて借する金ハ僅ハ五
 両をりの金とぞ。それ又整うぬるのて幽ま方の程と
 猜し多る。不よくとひこまへて此の程ともあるべし。回
 答されば。五四郎はてそふともくも。身が心ハ任せぬ。り
 くれと訪んとする。旅宿ハ府の街外ある。若子少女の所と

門のあり。榎あり。とととと目標の一人ハ索ね迷ふこと
 あり。吾もも旅のめとととと生活の為ハ朝夕ハ彼此を走り
 めぐる。ととと。亭午のころハ残暑も烈し。けは。家ハ在と
 あり。ととと。うち語ひつ。わあ。間ハ来るとも。かくて茨村
 まて来ぬ。ととと。右門ハて。て。別を告て。が。家ハ入り
 五四郎ハ府のく。ととと。うけり。えより。右門ハ子ども二人あり
 けり。冢子ハ富士太郎と名づけ。今茲十六歳あり。次ハ
 女児。め。小雪と名づ。が。十四歳あり。ととと。けり。いづれも。鄙
 夫ハ生育ぬ。ととと。その性ハ。伶俐と。ととと。拙。ととと。次女も
 きよ。ととと。風流。ととと。若子少女あり。ととと。妻の名ハ



右門府中
五郎と訪て
金を借んと欲

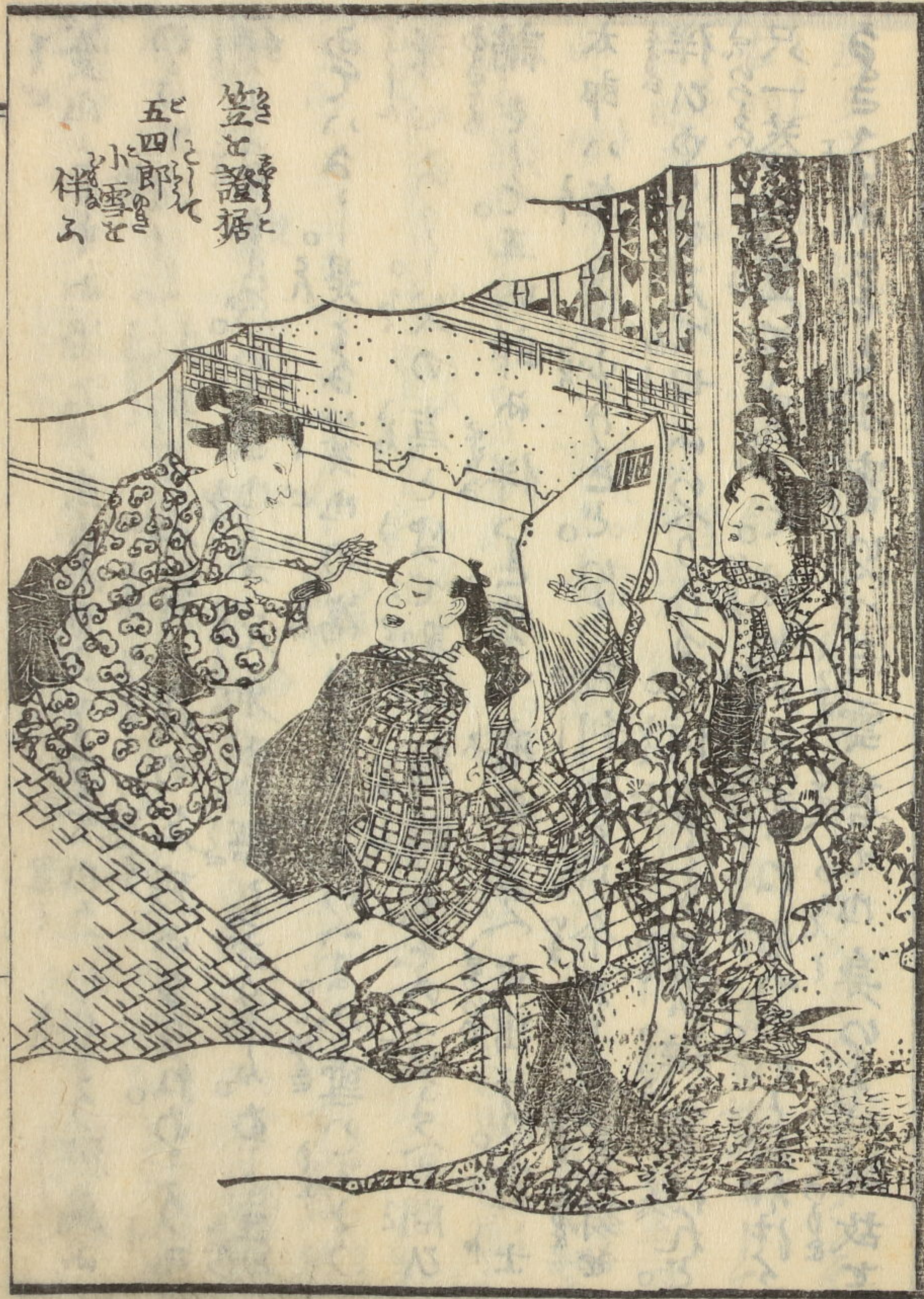


三雲といひてあるド村の武士の浪人菴原某が女思ひで早く
 父母を喪て便所のものゝ心で迎へてつが見の妻めらせしを却説
 門が父世のめりしを迎へてつが見の妻めらせしを却説
 右門の五四郎が懇ろの少一力をゆるぎもさふらうの
 けさ家みくりてもけんの首尾をいも子もぬり語らば其
 夜まが潜め妻の三雲のいふ一五十一語果ててりみかす。樂
 譜と携がれば浴へ上りても詮あり。まづとて猶豫せま
 遅未の罪脱がし然バ熱めたるのせまをせり子もホに
 そいづのめさせらんも。いづの心うらぐけぬるやめぬら
 まてうらぬといひて五四郎がひりりまたあつちもさく語り候

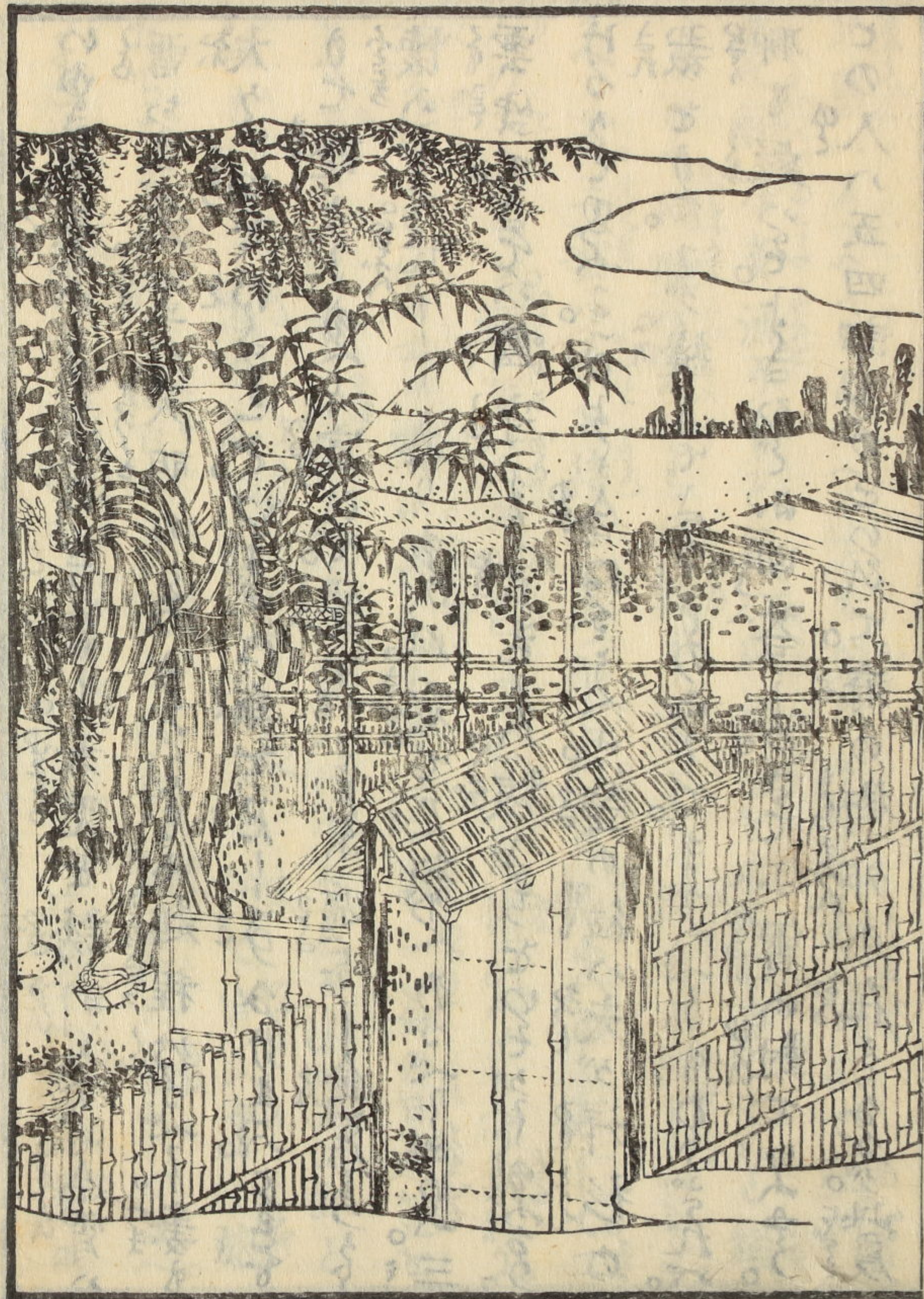
三雲も一びいりし。一びいりし昔てりみかす。山身
 僥倖あると強才學の勝るのめりぬら。ま
 神の機ゆの幸福めて五四郎とやらんが信くしくめせしも。
 只りといふらむ。皆是れ身が誠心を祖父君や父母の護て
 家と興さるるらんぬ。とくその人のいひの隨意金を借めて
 りと整めりしと。又バ右門もげゆと諾まひ。彼五四郎昼の中
 ろいふ家め在らむといひけむとて。次の日その頃を違ふと
 府のいひてを訪ふ。果して街外なる神舎の門め大なる
 榎のうらぶと。と思ひて外面よりさう覗く。裡め
 老髯うら波く只ひとり假寐して枕方めさくやるる屏風を

兄弟ハうろるゐるべくとも思ひくけむ。鱸嶋めて網引
 きて鱸居多漁りしとり瓜茄子をりてゆきてそれと換
 べりて。同胞りるとも朝まきより彼所へ行かぬ。さ
 うらむと三雲ハ夫を待とまらぬ。その人ぬらむとて二
 人の子どもが鱸を筑み入まらむと。うき擔ひくうり来れり。
 活る折しも富士が家の商人りきする男一蓋の日遮笠を
 りて来てゆかや。安もあぶひひけん。とまがハ五四郎と
 りのりり。嚮ハ右門ぬ。こが家と訪て宣ふや。旅
 だちもたやけの翌日ぬり迫りぬ。約束の金りて之。
 こまがその金とりて畑打川へ行る。身ハ又家ぬ

いゆきて妻ぬとまがの言告り女児を誘引る。今宵ハ
 番あき人翌ハ天明のころりとも起程はるべし。妻も
 大なる心せぬ。いまぬ身を見りひまけむ。とまが
 りて證とりの人と宣ひて笠をばこまが。遍与し金をばら
 懐みりて忙し。うらぬぬ定て見ぬ。ぬるべし。三
 雲安てまがハ國守より召さし。旅づらむをがりぬらむ。
 けらうと思ふ。りり合ぬる。人の笠の紐ハ夫が汗衫の
 裁せりて。こが縫まらぬ。ぬらむ。まが。べらむ。ぬらむ。
 聊も疑ひぬ。まが。ぬらむ。ぬらむ。ぬらむ。ぬらむ。
 この人ハ五四郎ぬ。ぬらむ。ぬらむ。ぬらむ。ぬらむ。



三國志



三國志卷之二

十一

父也とぞもみ洛上りあゆみあり。よるそ也身ハ今より彼處の
 ゆきて在り。故郷も今宵一夜の名残ありぬ。あつらひ
 頃のひりまはば。いさむ也身兄弟の語らざるが。あしき筋
 めていまい。是も父也の為あり。いさむ小雪ハ元より
 孝心ふくく父の為とて使て聊も推辞む。そのつりさへも問ひ
 請むして。五四郎の伴いさきて。府のくえ立出けり。富士
 太郎ハ年より少けきと。いと伶俐けき。今あらぬ男が妹を
 伴ひゆくを見て。母のつりける。何りとも思ひ辨へざれば。と
 只一盞の笠をよみて。妹を人の妻ねあひいとあはれけり
 ろまひふとと不審り。三雲答て也身いさむ縁故を

まどぎらび疑ひのふもとさうりうきと。そふあつぐのひりうとと
 右門が義満公の恩命をひらり。りより。楽譜を質として
 宇助の金を借するが。今愛復さんとまらふ術ありして。五四
 郎が使まつて。ふうく。憐れ。金と貸んといひ。いさむ。首尾委細の
 語り果てり。いさむ。このひりうきと。父也のいさむ。思ひを届
 るひが。いさむ。整。福も禍の端とるべし。まが子ども
 ぎあふ。いさむ。つりうきと。宣ひしを。今まは。いさむ。彼
 五四郎が家火。きのみ。父也も。索ね。いさむ。ひて。母刀。自の在せも。
 見て。帰りの。縦。今宵。一夜。小雪を。彼處。領おくと。何の
 過あり。いさむ。と。いさむ。富士太郎も。父が。幸福を。いさむ。深く

遣ぬ。くさる。彼が跡なき空言するものを。何とせんと慌忙く
 ぬぞ。右門大いうち驚きその笠ハリまきまの。五四郎を訪へて
 戴ゆき彼が門の榎の枝に置き置きてきて飯をとり給きて
 ひまごゆ身みはとのりを語りさうり。あつるを今その笠をりて。
 心身と祈り女兒を伴ひゆきしと思へば彼ハ拐児めてあつるぢや。
 ひまご遠くハ行へる。ゆで追蒐ていふ児をとり復してんこ。
 ひまごまきつ。外面へ走り出ま。富士太郎も後まきしを父め引
 副ゆへかどふ。あつて府の街外まで走り来り右門まき五四郎が
 家め至りて。ひまご中ハ闕窺るふまのみの婆も打狀居まは。
 少一心あちか。親子のろとも裡め入り家の四隅をりりう

見どぞ索る人ハ在らざして。あぬ男と女の主めけり。目今外より
 歸りぬと思へて夕喰食べて居りう。右門親子を死ていぢら
 より来りゆ人ぞと問ふ。右門答て。いまハ五四郎めあへまき
 めりてまきまの。あつるものろつとら。彼男いと奇げまる。顔して。いふ家め五
 四郎とゆふものま。その門をとり違へぬ。いつらんといふ。右門が曰
 ひまきのふもへまきま。五四郎めあぬ。且彼處ハ臥するハ
 五四郎が母刀自り。ふく蔵へあむと。とくその人を出して
 あつてへるへうと。いふ。彼男忽地類のあつる。あつる。この
 人ハゆへる。いふ。いふ。名ハ二三五と呼きて。この家の
 主人。又彼首ま。いふ。母より。近曾中風。あつて足も腰も

立む物ひりまきまき。夜も晝も打ふしてあはせど夫婦が草
 野へ出るとまゝ。案山子ながらの雷守をせしを五四郎とて
 母より六。孰か也身中つる元より五四郎との人と舎一箇
 たるひまけま。その名がまきまき。思ふよそのもの。郊原のま
 狐の柵を。身定て野干まき。妖まき。ひつる。よく
 心と鎮てまき。思の量めく。辱し懲せ。右門中や
 心づきて。まて五四郎の夫婦が晝に野み出てる。婆一人
 居るひとまき。あのみまき。家よりと偽り。まきを誘引ける
 よとあひま。只管怒り。堪まき。いふともせんまき。あけまき。
 主人の對て其許の宜ふまき。まき。思の誤る。鹿忽の

罪ハ許し。人へと賸てる。家を退出けま。富士太郎も本意
 まげあひ。とも立出。父の對てり。けり。前母の物語
 みてる。まき。細み。養り。知り。ぬ。より。直。城。の。赴。ま。許。ま。
 ま。日。ま。ま。して。五四郎が往方も。ま。妹も。ま。く。る。
 め。ま。ま。右門數度大息つ。ま。ま。思。ま。ま。
 め。今。飽。ま。上。の。恩。澤。を。蒙。ま。只。一。日。も。速。ま。洛。の。赴。
 べきの身の女児を誑りとま。ま。過。ま。ま。私。ま。
 う。ま。ひ。て。徒。の。日。を。費。ま。ハ。不。忠。ま。熟。思。ま。五四郎が
 竹。り。ま。一。朝。の。策。ま。の。ま。小。雪。ハ。子。ま。の。眉。目。も。醜
 う。ま。た。えて。漫。行。ま。ま。ま。け。ま。彼。拐。掣。と。ま。ま。便

三國卷之二

七

宜^ぎき^き 宇助^{うすけ}が 店^{みせ}めて^てる 物^{もの}が^がり^りま^まる^ると^と安^{やす}て^てふ^ふく^く謀^まり^り
 得^える^ると^と覺^あわ^わず^ず 織^お國^{くに}守^{まも}り^りの^の 往^ゆ方^{かた}を^を 索^{もと}め^める^るの^の 山^{やま}屋^や
 盡^つく^くと^と此^この^の 所^{ところ}に^に 盈^あま^まる^る 虧^くせ^せの^の 世^よの^の 是^これ^{これ} 前^{ぜん}世^ぜの^の
 悪^{あく}業^{ごう}を^を べ^べー^ーと^とい^いふ^ふ 富^ふ士^し太^た郎^{らう}も^も 涙^{なみだ}ま^まり^り ぐ^ぐら^らう^う 親^{おや}子^こ打^{うち}連^{れん}
 づ^づ 家^いの^の 帰^{かえ}り^り け^ける^る と^とぞ。

三國一夜物語卷之二 畢



